

ブロック整理のイメージをよく示すのは、事務処理で頻繁に使用されるマイクロソフト社のエクセルである。

エクセルの「事務らしさ」は、同じく汎用性の高いソフトウェアであるマイクロソフト・ワードと比較するとわかりやすい。ネット上で言葉のやり取りをする人でワープロソフトのワードを使ったことがないという人はいないだろう。今やワードは、言葉の世界の生活必需品となりつつある。これに対しエクセルは表計算ソフトである。同種のソフトはこれまで Lotus 1-2-3 などさまざまな商品が出てきたが、エクセルはウェブ上で使われるグローバル・スプレッドシートと並び、現在ではほぼ定番のソフトとなった。

もう一〇年以上前のことだが、私はかつてある知人にこんなことを言われたことがある。「ワードにできることで、エクセルができないことはないんですよ。エクセルはワードよりずっと優秀なんです」。実に事務的な口調だった。このMという人はちょうどこの頃、学会の事務局を担当していた、おそらく事務処理のことで頭がいっぱいだったのだろう。すっかり事務的な態度も身につけていた。

エクセルが「できないことはない」「優秀」だ、と聞いて私は、へえ、と思ったものだ。すべてエクセルで代替可能だとか。でも、ワードの真っ白な頁の方が使い勝手がいいのではないか。線を入れたければ後から設定すればいい。何より、広々とした開放感がいい、文字を書こう、言葉を継ごうという気分になる。枠があったら邪魔

じゃないですか？ といった疑問も湧いた。

一目みてわかるエクセルの最大の特徴は、その画面がはじめから分割されていることである。ワードのようなワープロソフトや、メール、SNSなどのメッセージ作成画面とは違い、画面が線によってセルと呼ばれる細かい単位に分けられている。こうしてブロックが用意されることで、情報はコピーや移動、集約などの整理がしやすくなり数値の計算も簡単になる。筆笥の引き出しのようなものである。筆笥がただの巨大な箱だったら使い勝手が悪いでしょう。(笑、と引き出しのある生活に慣れた人は言うだろう。

日常生活の必需品となったワードに対し、エクセルはこうして仕事世界での必需品となった。何よりそれは情報を把握するのにたいへん便利なのである。エクセルを使うのは「データを情報として「見える化」するため」という考えは、書店にならばほとんどすべてのエクセル教本に共通して書かれている。エクセル以外のソフトでも、その中にエクセル的な性質を隠し持っていることが多く、年賀状ソフトの宛名リストや、Zohoの記録や、ウェブサイトのプロフィールなどをエクセルの形式に変換して情報を取り出すと、出来事はきれいに整理されている。エクセルが整理役を果たすことで、さまざまなシステムがつながるのである。

こうしたエクセル的な整理術は、さまざまな形で私たちの思考のあり方とかかわってきた。とりあえずそれは会計



gunzou. 2023.2

題名	事務に狂う人々		
筆者	阿部 公彦		
No.	9.	副題	道を歩くようにして 小説を書く
備考			

エクセルはそんなに偉いのか？

連載もそろそろ終わりが見えてきたので、このあたりで改めて「事務の思考」について確認しておきたい。事務ならではのものの考え方とはどのようなものだろう。第一回では『てにをは辞典』から「事務的な説明」「事務的な態度」「事務的な電話」といった表現を引用した。こうした定型句が機能するということは、私たちの中にも「そうだ、これが事務的というものだ」といった了解があるということだろう。

事務の語源となった bureaucracy (お役所主義、官僚主義)の背後には bureau (引き出し付きの机)のイメージがあった。机に向かって書き、整理する。ごく当たり前の作業とも思える。しかし、そこには「書き残すことが重要だ」という一種の文書至上主義が見られるとともに、分けや整理の概念もついてまわる。現代社会では情報処理は紙ベースから電子媒体によるものへと大きくシフトしたものの、この整理のモデルは生き残った。電子媒体を扱うときに必須となるフォルダーによる分類や階層化は、引き出しや整理棚のイメージを——そのブロックや線や角の感触を——驚くほどそのまま引き継いでいる。中でもこうした

的な発想と言えるかもしれない。いや、会計的な発想にすぎない、とも見える。それだけにエクセル的なテクノロジ―は整理整頓にすぎない、情報処理にすぎない、として軽視されたり、疎まれたりしてもきた。とりわけ文学や哲学や美の世界とはかけ離れている。私もワープロソフトの無地の画面にこそ、自由で創造的な場を見てしまう。しかし、これは本当に適切な見方なのだろうか。

「事務処理」が隠し持つもの

ワードとエクセルの「思想」の違いについても少し考えてみよう。試しにオーソドックスなエクセル入門書の目次を参照してみる。

- Chapter 1 最初に押さえておくべき11の基本操作と考
え方
- Chapter 2 仕事が速い人は知っている1つ上の「見せ
方」テクニック
- Chapter 3 業務成果に直結する便利な関数11選
- Chapter 4 計算チェックと絶対参照を極める章
- Chapter 5 作業スピードを劇的に向上するショート
カットテクニック
- Chapter 6 コピーとオートファイル、並べ替え機能の超
便利な使い方

もちろん、ワードや紙媒体でも反復やコピー、順番の変更などは可能だ。しかし、大きな違いは、エクセルの枠でははじめから反復やコピー、順番の入れ替えが前提とされていることである。個々のセルにはそのための設定が用意され、枠による区切りを媒体にしてセルとセルの間でさまざまな交換や同一化や連携が行われる。優先されるのは枠であり、情報はむしろこの枠に従属している。そういう意味では枠内の情報はあくまで仮のもの、一時的なものにすぎないとも言える。他のセルにどういった情報が入力されるかであつさり既存の情報は書き替えられてしまう。一寸先は闇なのだ。

ワードの画面はどうだろう。デフォルトの白紙画面で大事なものは、言葉が一回限りのものとして演出されていることである。連続する白紙の画面からは、文章を前へ前へと流す時間の流れが読み取れる。そのおかげで書くという行為も区切りのない連続面の上で時間化され、前へ前へと進みながら連鎖する生き物のように提示される。

ワードというソフトはまさにその名のとおり、言葉をモデルにしているのである。そしてより重要なのは、その基底にあるのが時間の中で生成する「話し言葉」だということだ。数値であろうと記号であろうと日常会話だろうと、ワード上では言葉や記号が、まるで自然言語のように時とともに進むかに見える。これに対し、エクセルでは言葉や

- Chapter 7 実践的なデータ分析のはじめ方
- Chapter 8 Excelのグラフ機能を自由自在に扱うための5つのポイント
- Chapter 9 最適なグラフの種類の選び方
- Chapter 10 Excelの印刷機能をたった10分で極める
- Chapter 11 Excel完全自動化による超効率化への招待
状

この目次立てからも、大まかな考え方の特徴は見て取れる。すでに触れた「見える化」と並んで、3章から6章、11章などで強調されているのは関数を使った作業の効率化やスピード、自動化などである。エクセルの枠はただの区切りではない。そのセルにはさまざまな仕掛けが張り巡らされている。その仕組みを理解すれば同じような情報処理を繰り返す、簡単に、そしてスピーディに行うことができ。そこには言葉や数値をめぐるある態度が読み取れる。次のようなものである。

- ・ベースは罫線によって作られた枠であり、そこにどんな情報が入るかは任意。
- ・だから、枠内の情報はいくらかでも交換もしくは反復されうる。
- ・だから、枠内の情報はいくらかでもコピーされうる。
- ・だから、枠内の情報は順番も変更可能である。

記号はどちらかというところ「書かれ、蓄積されたもの」のモデルに依り、整理棚や倉庫に収められた「もの」に近い。ここでは時間の流れや言葉の生命らしさは抑制、もしくは相対化されている。

言葉かものか。対立項をこういうふうに立てると、ワード対エクセルという対立のアクチュアルな争点が見えやすくなる。エクセル的な発想は言葉を「もの化」すること、で、より密接にもの世界になじませる作用がある。エクセルには事務的思考のある部分が凝縮された形で現れ出ているのである。

社会の「格子模様」

エクセルに見られるような格子状の枠は、さまざまな形で社会システムに組み込まれてきた。すぐに思いつくのは碁盤、見取り図、方眼紙などの碁盤となる台紙や、「碁盤」が喩えとして使われる京都などの街路である。建物の構造、窓の枠、装飾品や衣服の模様などにも格子は活用されてきたし、空間表象の技術も平面や空間を格子状に分割するという発想に助けられて発達してきた。絵画面の遠近法はその典型と言えるだろう。しかし、より興味深いのは二〇世紀以降の美術で、格子の連鎖がそれ自体、美的刺激を持つものとして注目され新しい感性を育んできたことである。画家で言えばピート・モンドリアン、バーネット・

ニューマンや、グリッドからストライプへの橋渡しを試みるシヨーン・スカリーといった人たちにそうした感性の発露が見られるし、ル・コルビュジェの建築なども、格子的なイメージの派生と見なすことができる。こうした格子の援用には事務的思考の広がりだけでなく、事務ならではの美意識と呼ぶべきものが見て取れる。

格子をゆるやかに延長したと見なせる形態もあちこちで応用されている。前回とりあげた鉄道網はその好例である。必ずしも縦と横の線が直角に規則正しく交差するわけではないが、鉄道ならではの延長、曲折、枝分かれ、交差といった線の動きは、「網」と呼ぶのがふさわしいパターンの連鎖を生み出し、格子的な思想へとつながっている。中心を欠いた連鎖は全容の把握も簡単ではない。ドゥルーズ＋ガタリは『千のプラトー』の中で樹木状の超越的システムに対して「根茎」という概念を示し、「始まりも終点もない、いつも中間、もののあいだ、存在のあいだ、間奏曲 *intermezzo*」としてある多様体の可能性を追求している。

樹木やその根とは違って、リゾームは任意の一点を他の任意の一点に連結する。そしてその特徴の一つ一つは必ずしも同じ性質をもつ特徴にかかわるのではなく、それぞれが実に異なった記号の体制を、さらには非・記号の状態さえ機動させる。リゾームは（へ）に

複雑で大量にあるパターンの中から、ベストな解を求める問いは「組み合わせ最適化問題」と言われる。荷物の配送時間短縮のため、たくさんの地点を一度ずつ回る最短経路の検索など、身近な技術として長く研究されてきた。

葛西さんはこうした問題に使う「整数計画法」と呼ぶ手法を使って経路を数式化。コンピュータで解くことで、「稚内→肥前山口」の最長ルートを証明した。研究室で発表すると反響が高く、学会でも論文として発表した。

こうした事例からもわかるように、もともとは人為的に開発された体系であっても、いったん形をあたえられ、さらに別の体系と組み合わせられたりすると、把握が容易でない複雑さを持つようになる。事務処理化された世界ならではの事態と言えるだろう。第三回でも触れたように事務処理化が行き渡った世界では、個々の人間が対応すべき処理はルーティン化・単純化されるが、それと比例してすべてを統べる背後の仕組みは不可視なものとなっていく。そもそも全体を統一する原理や思想がない場合も多い。個々のシステムは網状につながっているだけなので、格子状の一つ一つの線が鮮明で区分けが明瞭でも、線が延長し連なつた先にいったい何があるのかわからない。通常扱う範

も（へ多）にも還元されない。「……」リゾームはもつばら線からなる。次元としての切片性線、地層化線といった線である。また極限的次元としての逃走線や脱領土化線からもなっていて、これにしたがい、これを追っていけば、多様体は性質を変えて変貌してしまふ。

ただ、著者も述べるようにこの議論の目的は、樹木か根かという二元論による決着ではない。実際、リゾームと呼ばれるイメージは、それが発端において否定しているかに見える西洋的な官僚主義の特質を、その格子的な構造を通してある程度、体現しているようにも思える。デイケンズの『荒涼館』でグロテスクな官僚制の権化として描き出された法廷は、まさに「始まりも終点もない、いつも中間、もののあいだ、存在のあいだ、間奏曲 *intermezzo*」でもあった。

連鎖し錯綜する格子の構造的な複雑さは、囲碁や将棋の盤が生み出す広大な可能性からも十分にかがいが知れる。鉄道マニアの間では、現在のJ・Rの鉄道網で同じ駅に二度立ち寄らずに乗り継げるもつとも長いルートを見つければ、といった試みが行われる。こうした計算は熟練者でも難しく、数理工学の専門家が特殊な手法を使ってようやく解明できるという。以下はそうした計算をやり遂げた人物を紹介する記事からの抜粋である。

囲を超えて線のシステムを把握しようとするれば、たやすく個人の想像力を超えてしまう。そうしたとき、私たちは「無限」の相貌を垣間見るのである。

「道を歩く」とはどういうことか

鉄道網の原型は言うまでもなく道路網にある。もちろん、鉄道と違って多くの道では既存の枠から逸脱することはそれほど難しくはない。しかし、道に沿って歩くという行為には、人間にとってきわめて原初的な体験が潜んでもいる。そのあたり、ベンヤミンの記述を参照してみよう。

街道のもつ力は、その道を歩くか、あるいは飛行機でその上を飛ぶかで、異なってくる。それと同様に、あるテキストのもつ力も、それを読むか、あるいは書き写すかで、違ってくる。飛ぶ者の目には、道は風景のなかを移動してゆくだけであって、それが繰り広げられてくるしかたは、周辺の地形が繰り広げられてくるしかたにひとしい。道を歩く者だけが、道のもつ支配力を経験する。（中国工芸品店）

「道を歩く者だけが、道のもつ支配力を経験する」とあるが、これをよりわかりやすく言い直せば、まるで書き写すようにして道を歩く者だけが、道のもつ支配力を経験す